

そろそろ初鯉の季節である。脂がのった鯉は美味し
 球規模で急激な温暖化が始
 る。約1万5000年前に地
 を食べていた。



馬淵川河口と新井田川河口。1999（平成11）年の撮影・青森県史編さん資料

まる。太平洋で黒潮が北上を始め、約9000年前頃には暖流が津軽海峡へ流れ始める。さらに約8000年前は現在よりも温暖化し、海水面が上昇する。いわゆる「縄文海進」である。太平洋に面した八戸低地は、類家低地帯付近まで内湾化したと推定されている。約8000年前縄文時代

カツオは回遊魚で春から夏にかけて太平洋を北上し、秋以降に南下する。新井田川流域に位置する帽子屋敷貝塚では、他の魚骨に比べカツオの骨が多く出土している。長七谷地遺跡や赤御堂遺跡では貝や魚骨と共に、釣り針や銛、石錘などの漁労具も出土していることから、縄文人は外洋でも漁をしていたと考えられている。

約6000年前頃から、徐々に海退が始まり、内湾だった八戸低地帯は火山噴火の影響もあり埋め立てられ、縄文時代中期以降貝塚の数も減少する。一方で堅果類などの加工に使用した道具や貯蔵に関係する遺構などが増加し、植物、貝・魚、動物の食料利用のバランスに変化がおきたと考えられている。

約1万年間続いた縄文時代には、地球規模の温暖化、火山活動などの大規模な災害がおきている。しかし、遺跡から出土した遺構・遺物などから、それでもたくましく生き抜く縄文人の姿が浮かびあがる。夏に青森で鯉を食べる機会があれば、約8000年前頃に同じく鯉を食べた縄文人をちよっとだけ思い出してほしい。

縄文人とカツオ

伊藤 由美子

（県民生活文化課

県史編さんグループ 主幹）

代早期の後半には、八戸市新井田川、馬淵川に沿った段丘上に貝塚が作られた。貝塚からは汽水域に生息するヤマトシジミ、内湾の干潟や浅い海に生息するアサリ・ハマグリ・オオノガイなどが出土した。また、内湾に生息するヒラメやカレイ、外洋性のスズキ・クロダイ・カレイ・カツオ・サバなどの魚も出土した。

的に「迷い鯉」と呼ばれる日本海の暖流にのって北上したカツオが、陸奥湾に入ってきたのだろうか？現在でも陸奥湾では夏にカツオが獲れる。

また、縄文時代前期の八戸市南郷の畑内遺跡からカツオやマグロなどの骨が出土した。畑内遺跡は新井田川の上流に位置し、現在の海岸線より約17km離れてい